

布野：こちらが本日の目次です。先ほどご紹介にありましたが、分厚い本を何冊か出しております。序章があり、1章、2章、3章と構成されております。学術書ですと作法がありますが、少し不満があり、目次に工夫をした苦心の作です。その中で、スラバヤという都市に絞って、それから広がる世界をできるだけ踏み込んだ形の1冊にしました。本に関しては以前から何冊か出版しておりますが、QRコードを組み込んであり、動画も見れます。特に次回、2回目については、カンポンについて取り上げます。カンポンとはインドネシア語で「ムラ」という意味です。「カンポンガン」と言うと、「田舎もん」という意味に一般的には使われてます。都市の居住地の動画についても組み込んだ1冊であります。

本の内容について全部を紹介するのはとても困難ですので、その中から、本日は、先ほど申し上げた、東南アジアスケールの伝統的住居についての部分を、お話したいと思えます。

お手元に自己紹介編と、スラバヤという都市のパワーポイントのスライドを用意してあります。先ほどご紹介にありましたが、国公私立5大学を渡り歩いており、放送大学でも講義を担当し合計で6大学になります。6年ほど前に日本大学生産工学部にお呼びいただき、7年目を迎えました。ほぼりタイアに近い形ですが、今回の公開セミナーについてお務めさせていただきます。

本セミナーは全2回となりますが、内容は私自身がずっと研究テーマにしてきてることです。51Cとは、建築の先生方や、学生はおそらく御存知かと思いますが、D51という機蒸気機関車の型番があり、日本で一番多く作られた機関車だそうです。それに匹敵するのが住居編の51Cです。1951年のC型という意味です。A、B、C型ともう1個あったと思いますが、それがこちらのパワポにあります左のほうにある間取りです。実は私が出た研究室の先輩が1951年にこちらを設計しました。下が約6メートル50で縦が約6メートル、ちょうど40平米ぐらいあり12坪です。第二次世界大戦が終わり、住宅不足が420万戸あったと推計されていたため、そのような住宅不足問題を解決するため、しばらくは12坪制限という制約がありました。そちらに合わせて鉄筋コンクリート造の、われわれの業界ではもう親しくなっておりますが、階段室があり、この51C型の住居を両側に並べるようなモデルができ、日本の戦後の建築スタイルの原型になったのが、この51C型です。

詳細について今回は省きますが、いわゆる2DKというスタイルです。ダイニングキッチンという形ができ、これが農村部も含めて北海道から沖縄までつくられました。この51C型の居住建築が、北は北海道から南は沖縄まで建築され、「建築スタイルがワンパターンでいいのか？」という問題が、私の学生の頃に起きました。当時の私はそのような問題を思いながら東南アジアを歩きだしました。

そのような中で、発展途上地域では大変な住宅問題、都市問題、食糧問題等もあるため、日本の政策と同じように、一律的な居住建築スタイルを形成すればよいのだろうか？と考えておりました。

話は少しそれますが本日は、日本の民家についても取り上げます。戦後にこのような団地で、ほぼ日本の都市部や農村も含めて景観がガラッと変わっていったわけですが、私が歩きだしたころは、以前の今のルーマ・アダットという、インドネシア語で言う「世界」に出会ったわけで、それをご紹介したいと思います。この写真、実際は、ジャカルタですけども、(ジャカルタの写真を提示)

今でもそんなに景観は変わらないです。赤瓦で(赤瓦は昔の占領下時代にオランダが持ち込んだもの)、この下は全体、カンポンといいます。都市なのにムラという意味です。従って英語で言うと、アーバンビレッジですが、それについての話は次回にします。ですから本日は、それ以前の民家がどうであったのかについて話をしたいと思います。

私の研究については先ほど丁寧にご紹介していただきましたので、省かせていただきますが、スラバヤという都市についてだけ、お手元にスラバヤ編があると思いますので、お話をさせていただきます。スラバヤというのは、市章になっておりますが、サメとワニという名前がそのまま都市名になっております。それともう一つは、史実は明らかになっていませんが、市の誕生日が1293年5月31日となってまして、日本との縁をすごく感じるのですが、それはモンゴル、すなわち当時の元朝、大元ウルスと言いますが、元朝が攻めてきた際に、ジャワ島も攻めている。その10年前に日本は元寇と言い、それを神風が吹いて撃退したという史実がありますが、その内容と同じように、このジャワのスラバヤは港町でしたが、元朝を撃退した日が1293年とのことです。

市の誕生日、マジヤパヒト王国というのが誕生した日ということですが、そのような由来がある歴史的な都市です。

そのような背景の中で、当時の日本人が南方に遠征を始めるわけですが、ちょうど明治の初めから明治の終わりにかけてスラバヤに行った日本人がおり、今でも「日本の花通り」という、クンバン・ジャパン言う通りが残っております。そのような、日本の盛り場的な空間があり、ここに書きました、日本領事館があり、台湾銀行があり、南印商会等がありました。ですのでスラバヤは日本と全く縁が無いわけではなく、それなりにつながりを持ってきた都市です。

1941年の12月8日の真珠湾攻撃から始まった太平洋戦争ですが、翌年の2月の末にスラバヤ沖海戦という戦争があり、日本が東南アジアを占領し、1942年から2年半ほどインドネシアを占領しておりました。そのような占領下の中でスラバヤに日本は隣組、町内会システムを持ち込みました。それが今でも生きております。

日本の場合は一旦GHQに町内会という制度を解体させられ、(もちろんサンフランシスコ条約で国際社会に復帰したときに、それは復活するわけですが)相当変質した形で日本では残りますが、インドネシアでは、日本が短期間につくった都市のカンポンと呼ばれる住民組織として、現在に至るまで持続されてきました。

そのような背景の中でスラバヤには興味があり研究を進めてきました。

さてここからが今日の本題です。

われわれ建築の世界では、ヴァナキュラ・アーキテクチャという言葉をよく使います。今日のテーマの民家や伝統的住居という訳でいいのですが、ここに書いてありますように、もともとはラテン語のヴァナクルムという「自家製」つまりは、「家で育てた」という意味です。それについての幾つかの具体的な事例を今から、ご紹介したいと思います。

先ほど言いましたように、日本では 51C という形で戦後の居住建築の多くは形成されてきたわけですが、それ以前の住居、つまりは「地域の生態系に基づく住居システム」とでもいいでしょうか、それらの形というのは、どういう要素によって規定されてきたのでしょうか？ 考えられるのは、気候や、その住居が立地する場所の地形等です。またその地域等で取れる木々の材料（植生）によって建築材料が異なったりもします。ですから、木がたくさん取れる地域では、その木を使って住居を建設し、木がない地域では、土を固めて日干しれんがをつくる。あるいは焼いて調整し、いわゆるブリックをつくって建築を行う等が考えられます。

そういった地域的な条件の中でつくられた住居をもう一度見直そう、というのが今回のセミナーの問題意識でありテーマです。

また「居住は地域を越えて共通する」ということも今回のテーマの一つです。ここに「大文明」と書いてあります。

シヴィライゼーションと文化とカルチャーはどのように違うのかを考えると、カルチャーというのはカルティベーション、つまりは農業、耕作するという意味です。ですから、土地に根付いているものをカルチャーと言い、シヴィライゼーションはシビルと言う、シチズン、つまりは「市民」という語源ですが、地域を越えていくものです。

分かりやすく言いますと、近代の科学技術等は地域を越えていくものですが住居についても、さきほど説明したような、地域で採れるもので成り立っています。

その中でも、地域を越えて共通する要素があり、特に東南アジアの場合は、日本の住居のルーツはいったいどうなんだ、というような興味とも結び付きがあり、個別性、地域性と、その多様性に対して日本と東南アジアで共通するものは何かを考えることが面白ことだと思います。

例えば、高床式建築というのは、世界中にあるわけですが、それが非常に目立つのは、東南アジアです。もちろんヨーロッパのスイスにもあり、湿地帯や川の上に住もうと思うと、床を上げなければならないということがあられるわけですが、日本にもその系譜があると思います。日本の場合は神社建築が高床です。我々が、先生に習ったのは、竪穴式住居は西方、あるいは北方式であって、高床は南方系であるということ。その南方系の中心というのが、おそらく東南アジアである。そういう話も含めて本日はお話できればと思っています。

この地図は農耕の発生の地域を示したものです。（レジュメ P2 2 参照）ユーラシア全体を見ますと、まず一番北には、こけだけの世界がある。ツンドラと言うものです。そのような、緯度が下がりますと北方林の世界があり、北欧からずっと北米まで木が非常に豊富

に取れる地域があり、いわゆる校倉（あぜくら）式の組み方が有名です。ログハウスという名前のほうが分かりやすいかもしれません。木を横に使って建築するというのが、ずっと北欧林の世界にはあります。その地域から南側に向かうと草原の世界が広がります。モンゴル高原が一番わかりやすいでしょう。そしてさらにその南側に砂漠があります。これは気象学の世界では常識ですが、いわゆる熱帯で温まった空気が水を含んできて、雨を降らし、乾燥して降りてくる。大体、緯度で言うと 20 度ぐらいかと思いますが、北緯は 90 度、そこに砂漠の帯ができるというのは地球の運動で決まっています。ですから、砂漠地帯での農耕作業というものはとても困難なものになります。

そのような砂漠地帯よりもさらに下にあるのが、「野の世界」、いわゆる平野でして、中国とインドのガンジス川流域が当てはまります。さらにヨーロッパでは穀物が取れるということで、その下へ行くと熱帯林があり、海の世界がある。（レジュメ P3 参照）これは東南アジアの気候区分ですが、住居の場合は、とても細かく、大陸部と島嶼（とうしょ）部に分かれます。大きく大陸部は山岳地域と丘陵部とデルタ地域に分かれますが、これでも規模的には大きすぎるのです。住居の形態というのは、もっと微妙な微地形があり、もう少し小さい範囲でいろいろな形態をしているという性質があります。これはもう既にお亡くなりになりましたが、タカヤ先生という方が書いた気候区分です。（P3 画像 1 参照）

これは皆さんあんまりご存じないかもしれませんが、今、人類の拡散の地図が出ていましたが、（P3 画像 1 参照）最近もジェノグラフィック・アナリシスということで、遺伝子でほぼアフリカから人類は拡散していったということが通説としてあげられております。そのような人類の拡散が、中国大陸へ行ってぶち当たり、稲作、要するに農耕が始まって以来、台湾から、オーストロネシア語族へと広がりました。例えばフィリピンのタガログ語とかジャワ語とか、マレー語もまさにそうですが、それらの言語が広がったというのがこの地図で表現されております。西はマダガスカル島、アフリカのものです。それから東はイースター島まであります。地球のおそらく 3 分の 1 以上の範囲に広がった。これは農耕を持って台湾からフィリピン経由でジャワや、そういうものがベースにあります。

それ以前に旧人の話をすると、ホモ・サピエンスの前にネアンデルタール人とホモ・サピエンスが交雑してたということが分かっております。シベリアにデニソワ人という旧人もいました。それから、フローレス島（バリ島の隣辺にある島）ですね、東インドネシアではフローレス人という旧人がいました。フローレス人というのは、身長が低くなっていた旧人であるということが、最近分かってきましたが、余談はここまでにしておいて。人類の起源と拡散もさまざまですが、住居のレベルの議論というのは、この辺から始めればより理解が深まると私は考えています。

この広がった範囲が次、左のほうにちょっと絵が出てますけど。ドンソン銅鼓という、青銅の銅鼓があります。太鼓のドラムですが、いろいろな種類があり、大きなものは相当大きいです。ドンソンドラムということで、エジプトのハノイから少し奥へ 100 キロ近く入ったところに、漢字で書くと「東山」（ドンソン）という山があります。そこで最初に発

掘されたためその名前がついたと聞いております。このドンソン銅鼓というのが、中国の南のほうからニューギニアの方まで発掘されてきました。この銅鼓はジャカルタ、インドネシアの国立博物館に、2部屋程度ドンソン銅鼓の部屋があります。それから上海の博物館にもあります。それから、ラオスでも見ましたし、タイの北のほうにもあります。そのぐらい青銅器時代に広がった範囲がオーストロネシア世界と重なっています。そこにはこのようなりリーフが書いてあります。それは、ちょっと屋根が反った絵が描いてあります。後ほど図として出てきますが、こういう棟が反った、まあ、日本にはあんまり棟が反ったものはあんまりありませんが。私は出雲の出身ですが、出雲地方は屋根が少し反ってるものが目立ちます。それから天竜川域がちょっと反ってます。ですが、日本の場合は、棟は大体直線的ですが、かなり反った屋根が東南アジアにはあります。ですから相当程度、今でも見れます。あるいは、徐々に消えつつありますが、そういう住居の形があったのではないかというふうにも想像できます。

もう一つ左の絵が高床式住居の分布図でして、(P3 参照)濃くなっている箇所が、土間式です。これはベトナムの南シナ海沿海部を指しています。

00 : 35 : 01

それからジャワです。スラバヤというのはこの一帯にありますので、実は直床式 土間式なのですが、フランスの地理学者が 1930 年ぐらいに作った地図ですが、大半は高床式だというのは、100 年もたたない前ぐらいの話です。実はオーストロネシア語の中に、「はしご」や「床が高い」、という言葉に関わる言語が共通に見いだされているということがわかっております。先ほど地図でお見せした範囲は、大体高床の文化圏だったのではないかというふうに。マダガスカルもそういう床については、そういうのが見られるということです。

先ほど、日本の床の話と棟が反ったという話をしましたが、幾つかのポイントだけ言いますと、これは日本の青銅鏡です。(P4 参照)この中で 1 枚だけ、家屋文鏡という、家型が書いた鏡が出てきています。そのような、これについては青銅の、さっきのドンソン銅鼓に描かれた絵と直接つながりませんが、日本の場合も古代の住居類型として、これは茗器(めいき)と言いますが、古墳等に一緒に埋めたものの中に、棟は反ってないということですけど。これは見事に高床が 2 つと竪穴式が 2 つ合計で 4 つ描かれております。

これは、私の『スラバヤ』という本ではメインとして書いていませんが、古事記や日本書紀、万葉集等に書かれた住居、あるいは建築に関わる要をすべて調べた先生がいます。その中で例えば、何とか宮、や殿と名のつくもの、そういう言葉とこれがほぼ対応するという意見があります。木村徳国先生や、堀口捨巳という大建築も、家屋文鏡の研究というのをされてますがこれを手掛かりに、かつての住居の姿を推定することができるという事例です。

もう一つ、今、床の話と屋根の反りの話をしましたがもう一つ、地域性とは別に共通性が見られる、という話しをしたいと思います。地域を越えて共通性が見られるという例ですが、日本の竪穴式住居を、どのように作ったのか。これが、その想定図です。これはギ

ユンター・ドメニク先生が書いた図です。スイス人の方で奥さんは日本人ですが……。彼が作成した図をもとに、実際に私は学生たちと竪穴式住居を作ってみました。この4本の丸太を組んで、ここを先端でおさえ、少し引っ張ると、割と簡単に起きます。そのように上をつないで床を張って、こうやると、竪穴式住居になります。高床式の建築物において建築の組立て方というのは、そんなにたくさんバリエーションはありません。

構造合理性と言ってもいいのですが、これは、大体東南アジアに集結して見られます。日本にはほとんどないのですが、白川の合掌造りぐらいの規模でもこうある。要するに、構造的な加工というのは、木材の太さや、どれだけの期間で建造を行うのかを考えると共通性が出てくるということです。

話が少し戻りますが、さきほどのドンソン銅鼓に描かれたのがこの辺に書いてあります。これは貯貝器って言いまして中国の雲南のほうに積載山から発掘した土器です。45センチ程度の大きさで、北京の国立博物館に置いてあります。

この取っ手の部分に貯貝器の貝をため、貯金をする。貯金の金が貝ですが、貝は昔、お金でした。これはインド洋でしか取れない子安貝という小さな貝です。それを昔の人はお金の代わりにしていました。この貯貝器の取っ手の組方や反り方がルーマ・アダットにおける伝統的住居の屋根の作りに似ているのではないかと私は考えております。

他には青銅器の家屋模型のような土器もあります。それがこちらです。

赤道直下のスマトラの真ん中程の地域に、ミナンカバウという種族がおります。王様クラスは住居の屋根角が、ゴンジョングと言いますが、6つあります。そして、一般の住居でも4つほどあります。

さきほどの話ですが、この図像に描かれたものは、実際に存在してきたのではないかと推測されてます。このミナンカバウではアラバウというのは水牛という意味であり、タガログ語でもカラバオという水牛を指す言葉です。これが、さきほどのオーストロネシア語でも共通な話ですが、この水牛の角を模したと彼らは証言しております。ミナンカバウというのは、勇敢な水牛という。自分たちの民族名にそういうものを名付けた事例があります。

少し話題が飛びますが、私の本で書いた順番に当初は並べたつもりなのですが。もう一つの視点として、倉型住居というものがあります。床の話、棟の反り方の話、構造の組み方、加工方法の合理性の話とは別に、もともとは穀倉、つまりは米蔵です。さきほどオーストロネシア族が台湾から稲作を持って下に降りたという話があり、これはフィリピンの山中に見られます。これは、沖縄の高倉とほぼ同じ組み方です。下を塞ぎ倉庫にする等しておりますが。この高倉は当初、フィリピン周辺に見られましたが、そこだけではなくてバリ島から東、東インドネシアまで見られます。

しかしながら、台湾に高床があるかと言うと、これは必ずしもそうではありません。昨年に、台湾にてシンポジウムがあり、専門家の先生方と議論をしました。実は、台湾の場合、さきほどの倉の話をしたように、主に南地域に高床は存在するのですが、必ずしも

すべての地域のあるとは限らない。そのような議論を通して、建築的に台湾が高床のルーツとなり、そのルーツが南に広がったということは、考えにくいのではないかとというのが私の考えです。

ですから、さき程の倉のように、米蔵が必要な地域には米倉がありますが、フィリピンの場合、これは倉ではなく住居として建造されておりました。ルソン島の山、マウンテンプロビンスと言われている場所に、イフガオ族という部族がおり、こういう形の家がありました。そのような倉型、つまりは穀倉や、稲作と関係があるということ。要するに、小型で解体して運べるかどうかということです。ですから、稲作の伝播と共に、高床を利用した建築を住居に転用するという発想は、地域を越えた関係が出てくるのではないかと推定できます。

適切な画像がなく恐縮ですが、次は住居における形の話をしてしようと思います。平面が円形な家の形が、実はスマトラの楕円（だえん）形です。スマトラの西インド洋には有名なニアス島という島がありますが、そこでは楕円形の高床建築物があります。さらに、高床建築に斜材が入り、何年か前に西スマトラ地震に襲われてしまいます。これは、明らかに地震との関係で斜材の基礎が入っているという話がありますが、この丸い系列はバリ島より東に顕著です。東マレーシアに円形の住居、穀倉が出てきますが、丸か四角かという問題は建築にとって結構、どっちが先なのかという話があり、その説にはいろんな説があります。おそらく結論は出ないと思いますが、丸を描くのに縄で円形を描けばいい、円の上に柱を立て、そのような組立てを行うというのは相当大変で、グラグラしてしまいます。さきほど竪穴式住居は、4本の丸太をくみ上げ、縛っていくという話をしましたが、東南アジアで見ても、丸系と四角系の建築様式が併存してるということです。これらが住居の形状の話となります。

そのような中で、いくつかのしっかりとしたシステムを持ったのがあります。その中の代表選手は、小さな島ですがジャワ島にあります。東南アジア全体は、土着ベースにインド化と言い、インドからの文明が伝わっております。具体的に言うと、宗教で言えばヒンドゥー教や仏教があります。ジャワは王国があったところですが、この柱を、4本柱で組み上げます。さらに、真ん中がとんがった形、ジョグローといいます。位の高い人はこういう家に住んだと言われております。屋根型で民家を分類するというのは、世界共通に見られ、日本ですとあまり宝形といえは伝わるでしょうか？建築の学生の場合、宝形や切妻や寄棟という言葉で表現しますが、ジャワでも分けております。

このジョグローという真ん中がとんがったものは、一番位の高い層が居住しますし、宝形は、真ん中1点で重なるタイプですが、基本的に寺院や、宗教的な建物に使われております。そのような、このジョグロータイプの建造物もスラバヤでは、文化圏ですので（東ジャワは例外ですが）かつてはそういうものが見られました。

それがもっと東のほうに行くと、（一番左側の図を指す）

これが切れたようなタイプがあります。これはマドゥラ島。さらに東へ行くともっと高く

なり、イリアンジャヤぐらいあると、書いてありますが先ほど比較してさらに色やバリエーションが出てきます。このような建造物は日本にも北海道から沖縄までたくさんのバリエーションがあると言いますが、東南アジアの場合は、はるかにそのバリエーションが多様です。その原理を今、一生懸命説明……部分的に説明しようとしています。

ある視点で物事を見ると、その共通性がいろいろ見えてきますよ、ということです。

さきほど円形の丸い形が建造されることがある、という話をしましたが、こういうふう

に並べる（P 参照）、これもやはり東インドネシアですが。フローレス島の建築物です。こういうちょっとした集落規模になる場合は、配置レベルでもいろいろなタイプが出てきます。

現在からこのような建築物をみると形だけでもたくさんあるということがわかると思います。

次に1つずつの住居の形式や空間の形式と形を幾つか見ていきたいと思います。

集まって住む形ということで、本ではまとめてありますが、スマトラ島というのは2,000キロ程度ありまして、本州が入ってします。おそらく北海道から沖縄まで行くのですかね。ですから、北方にバタック族という部族がおります。バタック族というのは6種族ぐらいありまして、その中にトバ湖という琵琶湖の何倍もあるような島があります。

それは古代に大爆発を起こして、地球の気候に影響を及ぼし、そのような湖になったと記憶しております。その湖の中にバタック族は6種族あり、200キロ程度の半径の中に、いるにもかかわらず、6種族すべて、住居形態が異なります。

気候はあまり変わらない地域にも関わらずです。

その中は高床でして、ワンルームです。こっちは倉の図です。住居と、倉の図です。ここで、住居と倉が1列に並び、その間の広場的な部分を共有するというタイプです。床の下から入る構造になっており、基本的にワンルームです。ここにデッキが通ってまして、ここへ登ることができ、こちら側の広場側に出ることができ、ここに楽器が置いてあります。この空間で祭礼をしたりするというのが小さな集落規模の生活様式です。集落全体が土壁で覆われているというようなタイプです。そのようなここは、父系、父、親系の家族、親族形態をしてて、一番奥に家長の家、それから長男の家、二男の家というようにある種の場合を建築し、大家族で何家族か住んでおります。真ん中にはいろりがあり、飯炊きをし、そのような床下には家畜を飼うというタイプの建築様式です。さすがに近代になると、中で煮炊きというわけにはいかず、後ろに厨房（ちゅうぼう）を増築したりするということがあります。そのような写真も、用意できればよかったのですが。

同じバタック・カロ。さき程のはトバ湖という湖の周辺ですが、後ほど興味があれば地図等で確認してもらえば面白いと思います。

このカロとはカロ高原という高原があり（P 参照）、その周辺に住むのですが、やはり全く異なる生活様式でして、いろいろな、この集落については、写真を撮った1年後ぐらい

に再開発があり全滅してしまいました。今はもうありませんが。

この大きさは白川の合掌造りぐらいの規模感です。中には、いろりが6つか8つ程度あり、それを1つの世帯がシェアします。こちらも基本的にはワンルームです。大集落で、さき程の組み方の特性がこういったところに出てきます。さきほど述べた原始入母屋造りですが、ただし、日本とはだいぶ異なり、組み方が違います。かなりやじろべえの様な構造をしており、屋根がすごく軽いです。このような組み方をしています。それから、中には大集落がありますが、これは「シホウハフ」と言いますが、作るにはかなりの技術がいります。これは納骨で、祖先の「オウベ」を吊り、祖先を礼拝したり、若衆宿や、いろいろなタイプの中で住んでるということがわかります。

ですから、先ほどのバタックトバとは、1つの集落単位は牧草と米蔵を並べるぐらいですが、このようなタイプです。100キロ程度しか離れておりませんが、違う住居と集落のシステムを持っているということです。

今ここで詳細な場所を確認できればいいのですが、倉型と言ったのは、このルソン島のマニラに位置する、北の山岳地帯です。ここから沖縄までは、実はそこまで距離は離れておりません。昔、この地域から黒潮に乗って、実験した人がいます。「カドカワ」という方だったかと思います。いくつか伝わっていることがあるのですが、この倉型はここからこちらにも見られると。今見たのがこちらの周辺の絵になります。バタック族が水牛の角と言った、ミナンカバウというのは、スマトラ。これは、2,000キロある中のものにして、ここに赤道が通っています。

次は家族類型の話です。エマニュエル・トッドは、皆さんご存じですか。テレビ等にも出ておりますので、かなり日本語でも訳されていますが、世界的に有名な文明批評家です。彼はもともと、歴史人口学や家族学を専攻しておりました。世界中のいろんな家族類型をまとめた最新の本は大変分厚いです。そこから引用した資料をここに書いております。いちいち説明すると大変ですが、エマニュエル・トッドは若いころ、「最後の衝撃」(『最後の転落』)でしたかな? その著書の中で、ソ連の解体を予言しました。私より2つほど年下ですが、要するに家族体系と社会体制の関係等を指摘した活動家です。有名なところを申し上げますと、例えば、ドナルド・トランプの誕生も予言したとか、そういう文明批評家です。家族の形について、東南アジア全体を見ると、このどこかが、違うとまづいのですが。これは歴史的な説明になりますが、基本的には核家族が支配的です。ただし、日本ではあまり分からないことは、僕らは双系制と習いましたが父方でも母方でもどちらでも選択ができる。双処居住と言う仕組みです。したがって父方居住、母方居住という言葉に、このトッドはなっております。

ですから、最初に、私が東南アジアを歩きだしたときは、「双処居住って何?」という感覚でした。日本の場合は、中国の影響を受け、やはり長子相続が一般的だと思います。それも東日本は長子系で、西日本には末子相続系等もありました。しかし、男のほうが家長で、家父長性に従い、長男が継ぐというような文化もある。東南アジアに行くと、それが非常

にルーズですよという話を私は聞きました。

先程は言いませんでしたが、これから出てくるもので、水牛の角と呼ばれる、ミナンカバウ族は、世界最大の母系制社会を形成しています。他にはインドのケーララ地方にナーヤル系という民族も母系制社会を形成しております。(この間亡くなられた中根千枝先生がフィールドにされたいたところですが)少し珍しいです。ただ、タイを含め、母方居住というのがこちら辺にあります。ですから、ソフトなことを言うと、さきほどは建築の話ばかりでしたが、家族の形としてはこのように様々な形態があり、さっきお見せした北スマトラでは父系的ということもあるため、地域によって、あるいは民族によっていろいろ違いがあります。ということが私のお伝えしたいところです。詳細は省かしていただきますがここに書いてある、ナーヤルについては興味がある方は是非調べてみてください。

集団で居住する形の中で2つほど、アダット族を見ましたが、ログハウスと英語で言われるようなタイプの建築があります。ボルネオ島は、インドネシアから側はカリマンタン島と言いますが、このロングハウスは日本語にすれば長屋です。このように小さいのですが、プランとしては細い部屋が連なってるイメージです。これが外側のベランダに当たります。すべて共同でつくられているわけではなく、これが1つ中に入ったところが廊下になっています。これは、少し向きが違いますが、こちら側に個別の家族の部屋があると。これは中廊下でデッキがあり、一番後ろにキッチンがあります。集合住宅の形式は東南アジアには非常に少ないですが、一応ありますということです。ただ、これは大家族制の建築様式で、全部が全部、血縁のある方で構成されているわけでもなく、むしろ日本のマンションやそちら側に近いというふうに言われています。これが双系制という原理で、こういう形もありますということです。

そのような、さき程の母系制と説明を加えましたが、もう一遍戻りまして、この場合の空間のシステムというのは、大体こういうのを見聞きし、いろいろなものの本を読んでつくづく思うことは、建築のシステムというのは非常にシンプルだということです。このミナンカバウの図では、王様の場合はものすごく大きい住居になりますが、スパンが縦に行くとかたくさんあるんですが、原型はこれです。9本柱の家で、少し大きいもので12本柱の家になります。ワンスパンをこの場合は娘の世帯が専用します。中央に「コモン」のスペースを取り、男性はここでごろごろしています。まあ、外へ狩りに行ったりするというのは、かつてはそうでしたが。ここが一番隅の部分が階段みたいになっており、特別なしつらえになっています。そのような場所で結婚式を行い、いろんな祭をするというような形式です。ここが部分が、床が少し上がってるというようなタイプです。

これがミナンカバウの建築システムです。ですから娘の数が多ければ、そのスパンがでかくなるものの本によると、これは53ぐらいのものがあつたという母系のそういう住居システムにあつた形態ということです。

さきほど見たバタックは、基本的にワンルームです。それからもう一つ、飛んで、スラ

ウェシ島という島があるのですが、そこにはサダン・トラジャと言う住居があります。トラジャと言うのは、トラジャコーヒーという、これは、廣田先生はよくご存じだと思います。その住居は非常に特長的で、これ、サドルと言ひ、馬のくら型と呼ばれていたりします。かなりの間、オランダの植民地になっても開かれなかったというふうに言われているのですが。植民地になってから宣教師が宣教に入り、概観が開けるときに屋根が反っていったと言われています。これは、さきほどのドメニク先生の本にもありますが。そういうことが言われています……。これは実際にはどうなのかは分かりませんが、そういう宣教師の証言があるということです。外に対して自分たちの住まいのアイデンティティを表すときに、昔はそんなに反っていない屋根の様式が反っていったのではないかと。そういう議論があります。ただ、これはさきほどのバタック族に近いのですが、小さく父系的ですが、小さな部屋があります。ただし、普段で言うと、これは倉がずらりと建ち並んでこちに母屋がある。ここに少し暗い写真ですが、この倉の数で家の格が分かるという、そういう地域です。それとさきほどチラッと申しましたが、**ニリニアニニ**というこのように並べて、これは普通に考えつく話かもしれませんが、こういう、先ほどちょっと見てもらいましたが、東のほうのインドネシアには、こういうパターンの住居の集まり方もあるということです。

こうやって具体的にいろんな地域を見ると、それぞれ、ごく最近と言ってもあれですが、200年ぐらい前、日本の……200年というのは言い過ぎですかね。要するに、明治期と考えると200年ぐらいですか。150年前というのは、こういう文化が世界中にありました。少なくとも大航海時代と一般的に言いますが、西洋勢力が海外進出を始めた16世紀にマゼランがいます。マガリャンイスが世界を一周したときに、今のマゼラン海峡、さらに南アフリカの一番下にあるのが、マガリャンイス海峡です。そこに裸で暮らしてた民族であるフエゴ島民がいたのです。要するに、少なくとも16世紀、17世紀までは人類（ホモ・サピエンス）が地球に拡散してから、そんなに変わらない住まい方を続けていた。これにはいろいろな要素がありますが、そう言えると思います。それが急激に変わったのは、やはり産業革命以後でして、鉄とガラスとコンクリートが広まったこと。

要するに19世紀に……これ、ちょっと用意したかどうか忘れましたが。トタン屋根が。トタン屋根というのは、亜鉛と鉄板のことで、亜鉛で被覆したのが屋根材になったものです。1820年ぐらいだと思います、トタンという人が発明しました。それが世界中に広がって、茅葺と瓦葺という作りが次第に消えていきました。

日本の場合は、それが起きたのが1960年代です。伝統的な民家がほぼ消えていきました。

そこから、スラバヤの中ではジャワ島ですが、ジャワについてはちょっと詳しく書いてますが、ジャワ島には日本で言うと少し誤解を招くかもしれませんが、風水のようなものが、ジャワ島のプリンボンという地域にあります。風水と言うと誤解があり、風水は中国のものでして、中国から日本に伝わっており、例えば、若い人はもう知らない話かも知れませんが、北東の門は鬼門と言ひ、そこには住居、水回りを置くなと言われていた。だか

ら空調も何もないときは、そのようなルールを守ったりしていました。四神相応や、蔵風得水という言葉もそれに当てはまるかと思います。蔵風というのは風を蓄えて水を得るという意味ですが、それは都市設計の場合には、北東には鬼門を抑える。京都で言うと延暦寺がそうですが、江戸だと寛永寺等です。もっと関東平野で言うと、筑波山のような。それと似たようにことを行なっており、住宅を、これはプリンボンと言いますが。どこに井戸を設けるとか、これは僕が歩きだした中でも、そういう本が出てて、そのような決まり事を守って木を切る時期等を、いまだに決めていたりします。

そのような、僕が学生のころ東京で住宅の設計を頼まれたりしたときに、風水師に家相を見に来てもらうと。今はありますか？ 今でももしかするとあるかもしれませんが。日本でもありました。土地の知恵とか迷信と言われていましたが、家相みたいなものがジャワにもあるということです。だから、これは多少ページを取って記述してます。

そして最後に、バリ島の説明です。隣ですが、隣というのはスラバヤから飛行機だと1時間もかかりません。要するに、ジャワ島というのは、インド化が起こり、それから今でもバリ島は80%ぐらいがヒンドゥー教徒なわけですが。インドとの関連を言い出すときりがなくなりますのでここまでにしますが。

最初にイメージだけ。この絵は立派ですが、家の門です。チャンディと言います。

その中に、幾つかの、これは分棟式と言いますが、棟を分けて構成するという建築をしています。1つの敷地に幾つかの棟……日本で言うと、沖縄なんかは母屋と釜屋。沖縄ないし九州のほうにそれにあたります。暖かい地域が多いわけですが、2つの棟で住居を構成しています。北限の限界は九十九里と聞いたことがあります。それがバリ島の場合は、もう少し多い幾つかの建物で構成されています。これは倉です。それから、これは面白いですが、バリ島の南のほうですと、さきほどの北東の門は日本では鬼門と。鬼の門と書いて、鬼が入ってくると言いますが。北東の門に屋敷神の「トゥール」と言いますが、そういう一画をつくっています。それから、幾つか、寝室棟が南にあります。このような建物で、台所棟というのはここにはないかもしれませんが。これは、この屋敷神「トゥール」の絵です。というように、幾つかの棟で構成されるというのが先ほどの説明でしてそのような幾つかの要素があって住居が形作られています。

この絵が今の屋敷が見てた北東の門にあたり、小さな家の場合はもう少し狭いです。

これがまさにですね。母屋と釜屋があって台所があります。さきほど家相やプリンボンと言いましたが、この入り口の位置や、こういうものをどこに置いたらよいか、みたいなことが書かれています。

そのようなことを説明するためには、これはバリ・ヒンドゥーに必ずしも限りませんが、世界がどのように構成されているのかという考えが重要になります。

基本的に天上階と地上階と地下階で考えます。3層で考えるという考え方があり、そのような、天上階というのはマクロコスモスであり、要するに天体の動きやそういうものを把握し、どのように解釈するかという話。またミクロコスモスというのは身体です。自分の体。

それに照応するのが、地上階に当たります。またメソコスモスと言ったりしますが。それは住居だったり集落だったり、都市だったりするという考え方があり、バリ・ヒンドゥーの場合は、明らかに世界観がはっきりしています。例えばバリ島の中でも山が中央にあるますが、それが一番聖なる場所にあたり、平野部が自分たちの住むところであり、海が邪悪な汚れた世界だという、そういう観念です。ですから南のほうに住居を建てる人たちは、北東側にそういう屋敷、神を祭る場所をつくります。その原理を説明したのが、これです。これは、要するに宇宙の構造と島の構造と、それから集落の構造と、人間でいくと頭と胴体と足でできてる。そういうことが図式的に言われています。それが、この配置にも表れています。これはバリ島のウンダギと言いますが。大工さんにいろいろヒアリングをしたときに聞いた話です。

要するに、これは世界中どこでもそうですが、東側がやっぱりいい場所なんです。こういうグラデーションになる。明るいほうがプラスで、西の日が沈むほうは暗い。それから、今度はバリ島の南側のエリアから言うと、山のほうが白く、聖なる場所で、海は汚れている。これを重ねると、一番いいところは北東になります。日本は鬼門でよくない場所ですが。だからこのような場所に、さきほどの屋敷神を置きます。これは図式的な説明ですが、大体そのようにできています。バリ島の伝統的な集落もそうですね。今でもそうです。

ですから、バリ島の場合は、あまり建築基準法やそのような法律的な規制概念を言わずとも、ある秩序に従ってできてるといえます。これが、アルディさんと言って、阪大に留学されてた方の学位論文から取ったものですが、バリ島のいろいろなところを調べると、バリ島の北側だと建築物の向きが逆向きになっているということが分かっており、その辺の山の位置付けが分かりました。これは集落の絵ですが、頭と胴体と足。足に何があるかと言うと、墓地です。死んだ人を焼いたりする。そのような、それぞれにプラ・プセというカヤンガン・ティガと言いますが。この頭の部分に、この集落の起源の寺があり、そのようなみんなの生活部分にも寺があり、足の部分には死の寺があるという。大体こういう構成をどこでもやっていますという話

それともう一つは、ミクロコスモスの話の際に言いましたが、こういう隣島間隔を決めるときには、少し調べた範囲では、8進法を使用するということでした。微妙に半分使い、要するに、建築ではよくやりますが、逃げの規則もつくってまして、それぞれ補足で、こうやって決めるのだというようなことを言ってました。言ってて、「じゃあ、大きい人と小さい人場合はどうするの？」と聞いたら、「いや、ここの世帯主の寸法でいいんだ」と言っていました。もう少し厳密に具材の寸法というのは身体寸法で決めてまして、これはどこでもそうです。エジプトだろうがピラミッドだろうが、世界ヨーロッパだろうが、どこでもそうできて、これは、アスターと言います、これはもうインドから来た言葉で、ひじ尺と言いますが。ひじの長さで決めます。それから具材、日本ではある物で長さを決めるということはあまり見たことはありませんが。両手を広げた＝ヒロ＝、これは中国から来ます。これが基になっているということです。ですから、かつてはそのような長さの試行

錯誤や、柱と柱の間をどうすればよいか、その柱の太さをどうすればいいかという問題は、経験上の積み重ねで伝統的な集落や住居がつけられていたということです。

その例としてバリ島の事例が非常に分かりやすいです。そこにさらに宇宙観や世界観とリンクしているという点が非常に面白いです。

最後に、少しばらばらな事例紹介になりましたが、途中で入れたいろいろな視点もご理解していただければ幸いです。最初に 51C と言いながら、いったい何のために調べているのかと思う方もいたかと存じますが。もう一言言いますと。再来週に話そうと思っていますが、51C をつくる際にも、そういう伝統的なホモ・サピエンスが培ってきた知恵みたいなものを、もう一度見直して活かせないかという意味で、たまたまチャンスがあり、もちろん現代の技術ですが。こういうスラバヤ・エコ・ハウスと言って、例えば地域＝参画＝を使ってとかいう話もあるのですが。これ、再来週にもう少し詳しく話そうと思えますけど。井戸水をソーラーバッテリーでポンプを回して循環させ、これは、輻射（ふくしゃ）冷房と言うのですが、床輻射冷房とか、そういう今のちょうど……延期になったんですかね、気候変動パネルが。今日、声明が出る予定だったんですけど。延期になったようですけど。

こういうことを考えながの今です。篠崎先生ともう 7 年目になりましたけど。

大学の授業ではスラバヤのいろいろな……古田さんが、そのような学位論文を書きました。いろんな地区をケースにしなが、そこにどういう提案ができるかというのを積み重ねています。これは本気です。向こうでは、カウンターパートが、スラバヤ工科大学に大先生がいるのですが。そこにアプローチして、なんとか実現したいというのを追求してます。ただ、コロナになったので、ちょっと今、動きが止まっていますけど。実は、ここで考えているということは、日本の町についても同じようなアプローチができるんじゃないかと思って、ある種のその試行実験以上のことができればいいかなと思っております。

少しばらばらとしたかもしれませんが、10 分前ですので、この辺で質問を受けて、補足できればというふうに思います。本日はどうもありがとうございました。